



●第五卷

『近代Ⅰ』

畑有三・山田有策 編

# 日本文芸史

表現の流れ

企画委員

古橋信孝

藤井貞和

林達也

山田有策

鈴木貞美

宮腰賢

河出書房新社

## 『日本文芸史——表現の流れ』 はじめに

ことばの生命を復権するために

本シリーズは、『古事記』『万葉集』以前から現代にいたる日本の文芸作品に関心をもつ、すべての人びとのために企画された。

文芸作品を読むとき、われわれはそれを生み出した人びとが見、感じ、考えた世界を生きる。作品を読むことによって、時代や文化を異にする他者の生を共有し、心の経験を大きく広げることができる。

本シリーズは、読者にそのための手がかりを提供するために編まれている。

世界的規模での文明の行きづまり、精神の危機の進行が論じられる今日、われわれの現在立っているところを明らかにし、未来を切り拓くために、文化的精神的遺産の総体としての見直し、火急の課題である。あらゆるものが情報化され、知識の断片と化するような世界は、貧血症的な世界にすぎないだろう。世界を生氣にみちたものとして取り返すために、とりわけことばの生命を復権させるために、文芸作品の息吹きをわれわれのものとすることが不可欠である。遺産は過去のものではない。われわれの前に、われわれのために等しい価値をもって現存しているのだ。

われわれが日本の文芸作品の歴史の見直しを企画し、より多くの人びとに親しみやすい形で出版しようとした根本的な目的はここにある。

文芸作品独自の生きた姿を総体として明らかにする

われわれにとって文芸の歴史とは、作品の歴史にはかならない。それは作品をめぐる歴史的事実の集積でも、作品を支えた思想の変遷でもない。ことばによって語られ、書かれ、聞かれ、読まれ、惹きまれてきた、まさに生きた作品の歴史にはかならない。

文芸作品を、その生きた姿においてとらえなおすこと、それが生まれ、受容された、そのままの姿に限りなく

近づこうと試みることに、これが文芸の歴史にアプローチするわれわれの基本的立場である。

この立場は、人間のことばによる活動の場において作品をとらえ、ことばの芸<sup>ワザ</sup>として考察する方法に立つことを導く。その意味でわれわれは本シリーズを『日本文芸史』と名づけた。

表現の形質を洗いなおし、流れをとらえる

われわれは作品をめぐる歴史的事実の集積や文芸思潮の変遷を追うことに終始する既成の「文学史」から訣別するとともに、作風の変化を社会の歴史の変遷から説明しようとする「文学史」の方法とも訣別する。

たしかに文芸は、社会のなかに生まれ、社会のなかに息つき、社会を反映する。が、文芸の流れは、社会の変化に還元することはできない。

表現は前の時代の様式を規範として負い、それを受けつぎ、更新し、あるいは革新して生み出される。表現の流れは、社会の歴史につきうごかされつつも、それから相対的に独立した軌跡を描くものである。

われわれは、それぞれの作品を生きた姿においてとらえるという立場から読み直し、表現の流れのなかに位置づけ直すことをもって、総体としての文芸作品の流れの記述を行った。副題に「表現の流れ」と付したゆえんである。

目次

はじめに

鈴木貞美

1

序説

この巻のためのノート

山田有策

山田有策

14

10

第一部 新しい言葉をめざして

概論 山田有策

15

第一章 「東京」にふさわしい文化

第一節 江戸から東京へ

山田有策

19

I 新しい「東京」の装い

20

II 新しい「東京」の風俗——書生たちの群

21

III 「東京」の庶民たち

23

IV 没落する士族たち

25

V フェミニズムの生誕

26

VI 「家」や「家族」の変質

28

VII 子供たちの出現

30

VIII 身体・健康・病氣

32

IX 地方・故郷・帰省・自然

34

第二節 新しい言葉

山田有策

39

I 西欧語と翻訳

40

II 国字改良の必要性

42

III 言文一致論の発生とその運動

43

IV 言文一致の功罪

44

V 明治初期の文学の文体

45

第二章 伝統文化の改良と潜行

VI 口語文体の試み

山田有策

46

第一節 漢詩文と和歌・俳句

山田有策

49

I 漢詩の命脈

50

II 漢文の抵抗

51

——成島柳北・服部撫松・田島象二

III 和歌・俳句の低迷と潜在的生命力

52

第二節 戯作と演劇の改良

山田有策

55

I 開化期戯作のバラエティ

56

II 戯作の最後

57

III 演劇や芸能の改良

58

第三章 異質な言葉の流入

——翻訳小説の発生

山本芳明

61

I 翻訳の発生

62

A 科学技術への驚異の眼 B 西洋風俗・人情への好奇心

II 花柳春話

64

Ⅲ 「花柳春話」の人間像 B 翻訳意識とその文体  
A シェイクスピアという神話  
A 文学的受容の系譜 B 演劇的受容の位相

66

Ⅳ 翻訳のその後

A 翻訳意識の深化 B 翻訳の文体

68

第四章 政治小説

山本芳明

71

Ⅰ 自由民権運動とその言葉

72

第二部 新しい文学の言葉

概論 畑 有三、83

第一章 文芸の改良

第一節 新体詩の発生

畑 有三

87

Ⅰ 「新体詩抄」とその周辺

A 「新体詩抄」の前提 B 「新体詩抄」の位置

88

Ⅱ 新体詩の時代

90

第二節 改良主義者・坪内逍遙

畑 有三

93

Ⅰ 「小説神髓」

Ⅱ 小説家逍遙

A 春のやおぼろの文学世界 B 近代小説への苦悩

95

94

Ⅲ 演劇へのスライド

97

第二章 突出する表現とその孤立

99

A 新聞というメディア B 演説と民権歌謡  
Ⅱ 初期政治小説の位相

74

Ⅲ 翻訳政治小説の発生と展開

A 桜田百衛 B 宮崎夢柳

75

Ⅳ 経国美談

77

V 佳人之奇遇

78

Ⅵ 政治小説の変貌とその後

79

第一節 二葉亭四迷の苦闘

畑 有三

99

Ⅰ 写実小説理論と創作実践

A 「小説総論」 B 「浮雲」

100

Ⅱ 口語文体の可能性

A ツルゲーネフの翻訳 B 言文一致と表現主体

102

第二節 新制度の輸入者森鷗外

田中 実

105

Ⅰ 鷗外と時代

Ⅱ 「舞姫」「うたかたの記」「文づかひ」

A 舞姫 B うたかたの記 C 文づかひ

106

Ⅲ 鷗外と文体

110

第三章 拡大する言語圏

第一節 読者の期待と新聞・雑誌

林原純生

113

Ⅰ 女流の誕生

114

II 撥鬢小説・探偵小説などの盛行

III 童話の発生

第二章 硯友社の作家たち

I 山田美妙の文体改良

II 尾崎紅葉の文学世界

第三章 批評の試み

I 石橋忍月と内田魯庵

II 斎藤緑雨の屈折

第四章 思想と文学の言葉

第一節 民友社の思想圏

I 徳富蘇峰の思想と文学観

II 宮崎湖処子と嵯峨屋御室

第二節 政教社と国粹主義

I 志賀重昂

II 三宅雪嶺と陸羯南

第三章 組み替えられる言葉

第一章 詩歌の言葉の組み替え

第一節 近代詩の誕生

I 『若菜集』の成立

第三節 文学界と北村透谷

I 北村透谷

A 生涯 B 詩 C 思想

II 『文学界』の人びと

第五章 屹立する反近代世界

第一節 幸田露伴

I 露伴の遍歴

A 「五重塔」の建立まで B 『風流微塵蔵』から  
『天うつ浪』へ C 史伝の世界 D 「運命」

II 露伴の文学的宇宙

A 男性的倫理と東洋的宇宙観 B 小説・考証・随筆

第二節 樋口一葉

I 一葉の生涯

II 明治女性の種々相

A 「たけくらべ」 B 「に」りえ」と「十三夜」  
C 文体

概論 山田有策

II 『抒情詩』

III 土井晩翠

第二節 明星の歌声

山田 晃 165 166

林原純生

116 118

林原純生

119 120

林原純生

121 122

林原純生

123 124

林原純生

125 126

127 128

129 130

131 132

133 134

林原純生

135 136

登尾 豊

137 138

関 礼子

139 140

山田 晃

141 142

山田 晃

143 144

145 146

147 148

149 150

151 152

I 与謝野鉄幹

II 与謝野晶子

III 『文庫』の人びと

### 第三節 象徴詩の誕生

I 蒲原有明

II 薄田泣菫

### 第四節 先駆者子規とその後継

I 短詩型文学の革新

A 俳句の革新 B 短歌の革新

II 写生の地平

III 『ホトトギス』と虚子

## 第二章 様式の桎梏と文学空間の拡大

### 第一節 美文の伝統の変容

I 高山樗牛

A 生涯と思想的推移 B 文学的特質

II 紀行文の諸相

### 第二節 模索と挫折

I 川上眉山

II 広津柳浪

III 小杉天外

IV 小栗風葉

### 第三節 幻想の彼方へ——泉鏡花

東郷克美

I 鏡花の遍歴

A へ鏡花世界への誕生 B 美とエロスの展開

II 幻想の空間

A 神秘と官能 B 母への思慕 C 鏡花の文体

### 第四節 東洋の発見

I 小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）

II 岡倉天心

A 天心の生涯 B 天心における「詩」とナショナルイズム

III 柳田国男

A 柳田国男の生涯 B 柳田国男の「文学」

### 第五節 社会小説と家庭小説

I 田岡嶺雲と内田魯庵

II 後藤宙外

III 菊池幽芳

IV 徳富蘆花

A 徳富蘆花の生涯 B 徳富蘆花の作品

### 第六節 ルポルタージュと社会主義

I ルポルタージュの系譜

II 木下尚江

## 第三章 新しい制度への試行

### 第一節 自然の発見と写生

I 絵画と写生

20

206

211

212

216

219

220

221

222

223

227

228

231

232



|                  |     |
|------------------|-----|
| Ⅱ スケッチの試み        | 233 |
| Ⅲ 社会と個           | 234 |
| Ⅳ 視点・視線・運動       | 235 |
| 第二節 写生から小説へ      | 237 |
| Ⅰ 高浜虚子・伊藤左千夫・長塚節 | 238 |
| Ⅱ 真山青果           | 240 |

山田有策

|              |     |
|--------------|-----|
| 第三節 国木田独歩    | 243 |
| Ⅰ 独歩の遍歴      | 244 |
| Ⅱ 独歩の作品      | 245 |
| 第四章 新派劇の展開   | 249 |
| Ⅰ 壮士芝居から新演劇へ | 250 |
| Ⅱ 新派劇の成立     | 251 |

藤木宏幸

## 第四部 文学の制度的確立

概論 山田有策

### 第一章 自然主義という制度

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 第一節 自然主義の台頭           | 257 |
| Ⅰ 自然主義文学運動の展開         | 258 |
| Ⅱ 描写論の発生              | 260 |
| Ⅲ 自然主義文学運動の終焉         | 261 |
| 第二節 島崎藤村              | 263 |
| Ⅰ 藤村の遍歴               | 264 |
| A 作家としての出発 B 『破戒』と『春』 |     |
| C 『家』の周辺 D 『夜明け前』     |     |
| Ⅱ 藤村の倫理と文学            | 268 |
| 第三節 田山花袋              | 271 |
| Ⅰ 田山花袋の生涯             | 272 |
| A 出自と文学的基盤 B 自然主義への転回 |     |

岩佐壮四郎

十川信介

相原和邦

### 第二章 夏目漱石の存在

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| Ⅱ 花袋文学の表現                      | 274 |
| 第四節 徳田秋声                       | 277 |
| Ⅰ 徳田秋声の生涯                      | 278 |
| Ⅱ 秋声文学の表現                      | 279 |
| 第五節 岩野泡鳴                       | 281 |
| Ⅰ 泡鳴の生涯                        | 282 |
| Ⅱ 泡鳴文学の表現                      | 283 |
| 第六節 正宗白鳥                       | 285 |
| Ⅰ 正宗白鳥の生涯                      | 286 |
| A 出自と文学的基盤 B 文学への傾斜 C 自然主義者として |     |
| Ⅱ 白鳥文学の表現                      | 288 |

相原和邦

相原和邦

相原和邦

自然

石崎等

I 漱石の遍歴

II 漱石の文学世界

第三章 二葉亭・鷗外の回帰

第一節 二葉亭の帰還

I 人物造形の探求——『其面影』

II 日本近代の陰面——『平凡』

第二節 鷗外の回帰

I 表現形式の解放

II 非自然主義の位相

III 現代から歴史へ

第四章 詩歌の変貌

第一節 象徴詩の展開

I 上田敏

A 『海潮音』 B 享楽主義の提唱

II 木下玄太郎

第二節 短歌の制度

● 日本語の流れ

① 新しい概念と新しい表現

② 言文一致への試み

③ 「国語」制定への動き

清水康行

畑 有三

小泉浩一郎

剣持武彦

篠 弘

292

296

303

303

304

305

307

308

309

310

313

314

317

319

319

I 伊藤左千夫

II 長塚節

III 窪田空穂

IV 前田夕暮と若山牧水

V 土岐哀果

第三節 石川啄木

I 啄木の生涯

II 啄木作品

A 短歌 B 詩 C 小説 D 評論

第五章 近代劇の誕生

第一節 新劇運動——文芸協会と自由劇場

I 文芸協会

II 自由劇場

第二節 近代戯曲の形成

I 社会劇と気分劇

II 新史劇の展開

上田 博

藤木宏幸

藤木宏幸

④ 国定教科書の登場

巻末

主要索引(人名・作品名・事項)

執筆者紹介

320

321

322

323

324

325

326

327

331

331

332

334

335

336

337

339

日本文芸史  
第五卷  
近代 I

## 序説

「ポスト・モダン」(近代以後)という言葉に耳にするようになってからすでに久しいが、あらためて、まず、「モダン」すなわち「近代」とはいかなる制度であり、いかにして生成してきたのかを考えてみると、この問いじたいがきわめて答えにくい難問(アポリア)の一つであることに気付く。いまわれわれが生きているこの世界がいれば「近代」の極北にあたるわけだが、この「現在」そのものがきわめてとらえにくい形に拡散・膨張していて、その生成のプロセスはおろかメカニズムさえも抽出できなくなっているからである。ことを日本に限定し、対象を文化あるいは文学という狭い世界に限定しても、問題はやはり同じで、実に把握しにくくなっていると言わざるを得ない。

おそらく、ここに、視線を過去にむけ、たとえば幕末から維新にかけての時代に注目し、その時点から洗い直すといったクラシックな方法が甦ってくる根拠がある。ここで、文化や文学において「近代」とはいかなる制度として発生し、生成してきたかを洗い直そうとしているのは、あくまでも不可視に近くなっている「現在」そのものを可視のものとして抽出したいからにはかならない。いささか迂回した方法であるかもしれないが、文化や文学の「現在」はそのルーツとも言うべき「近代」の発生と生成のプロセスを問うことで結果的には説明されてくるのではないか。

### 文学における日本近代

文化や文学の日本における「近代」を洗い直していくと、その背後に「西欧近代」の文化・文

学の影をどうしても見出さずにはいられない。そのことは日本の「近代」そのものが「西欧近代」という巨大な幻影におびえ続けてきたことに負っているわけで、いわば宿命的なものと言つて過言ではないのかもしれない。たとえば、それは江戸から明治への移り行きのなかで、「江戸」という日本独自のローカルな都市から「東京」という擬似西欧都市へのすさまじいばかりの転換としてきわやかに示されている。確かに以降「東京」は巨大化・西欧化の一途をたどり現在では完璧に異様とも呼べる国際都市へと変貌してきているのである。この日本近代の顔とも呼ぶべき「東京」にふさわしい形で発生・生成してきたのが日本の文化や文学の「近代」ではなかったろうか。本書はこうした発想を出発点として文化や文学の「近代」の発生と生成のプロセスを追うしようとしたものである。

文化、特に文学は言葉によって生成される。だとするならば、「東京」という全く新しい都市にはどうしても新しい「言葉」や「文体」が必要とされるはずである。この新しい「言葉」や「文体」は、伝統的に形成されてきた漢文や和文をベースとした「言葉」や「文体」の組み替えによって発生・生成した。本書はそれを言文一致運動をベースにして生み出された「口語体」としてとらえ、それが文学を大きな制度として定立させていくプロセスを追求めたものである。もちろん、逆にそうした「言葉」や「文体」の組み替えに抵抗し、伝統的なものの再生をはかる動きも活発であった。そうしたリアクションのダイナミズムが日本の文化・文学の近代を豊饒なものにしていることも否定できない。本書はそうしたいわば非・反近代の魅力をも十二分に汲み上げているはずである。

## 第一部 新しい言葉をめざして

ここでは時間的に明治初年代から一〇年代にかけてを対象としている。

とくに第一章「東京にふさわしい文化」を序論としてかけ、日本近代と文化や文学の近代を生成させていくものを総論として展開している。ここに本書のモティーフやテーマが凝縮されていると言つてよく、その後の展開の淵源となっている。具体的な展開としては欧化の波にそれ

までの伝統文化・文学がいかに洗われていったかが一つの大きなテーマとなる時代であり、戯作・漢詩文・和歌・俳句・歌舞伎・語り物などの命運が問われた。いずれも「改良」を強いられはいたが、それまでの生命力は簡単には消失するはずがなく、漢詩文・戯作は潜行したもの、その他は以降の時代にしぶとく再生していくこととなるのである。また、欧化そのものとして翻訳や翻訳小説が発生したのもこの時期で、以降、日本の近代に大きな影を投げかけていくのである。この流れとクロスするのが政治小説の発生で、この時期の特異なテーマとなっていると言えよう。

## 第二部 新しい文学の言葉

ここでは時間的に明治一〇年代中頃から明治二〇年代末までが対象となっている。内容的に言えば「新体詩」の試みや坪内逍遙の「文学改良」がいかなる地平を切り拓いていったかがテーマとなっている。新しい文学の言葉が要求されているにもかかわらず、それがなかなか発生せず、発生しても定着しなかった時代と言ってもよい。新聞・雑誌などジャーナリズムが拡大し、書き手も読み手も多様化するなかで、文学や思想がスタイルを求めて苦悶した時代とも言えよう。硯友社系の作家たちが相対的に安定した風俗小説に安住する中であって、二葉亭四迷・森鷗外・幸田露伴・北村透谷・樋口一葉らが自立し、それぞれの言葉や文体で独自の世界を切り拓いていた。それらの世界は「口語文体」の定立という流れとは別に日本文学の奥深さを伝えてあまりあるとって過言ではない。

## 第三部 組み替えられる言葉

この明治三〇年代はどダイナミックな時代はない。まず低迷をきわめていた詩歌が与謝野晶子や正岡子規あるいは島崎藤村らによってようやく新しい生命を吹き込まれ甦った時代なのである。いずれも古典を再生させ、その力によって形骸化していた詩歌を活性化させていったわけ、完全に言葉が組み替えられていくためにはいまだ少し時間を必要としたが、散文よりほぼ一〇

年ほど遅れたものの、革命とも呼ぶべき火の手が上ったことは注目に価する。さらにこの明治三〇年代において重要なことは、特に詩を捨て散文家へと転身していこうとする国木田独歩、田山花袋、島崎藤村らによって言葉の組み替えが意識的にはかられたことである。この試みは三〇年代末に結実し、一つの文学制度を定立させていくことになったが、こうした流れと対照的に、二〇年代において安定した力量を示していた硯友社系の作家たちは、鏡花を例外として総敗北していかにざるを得なかった。彼らの言葉では時代の要求とも言うべき「自然」も「社会」も表現し得なかったからである。こうしたなかで、泉鏡花だけは、伝統的な古典を再生させつつ、全く独自の文学を編んで一人屹立していた。

#### 第四部 文学の制度的確立

明治三〇年代末から四〇年代にかけて、ようやく日本に文学の近代的制度が定立することとなった。それは「口語文体」が文学文体として定着したことに負っている。以降、この「口語文体」の制度は現在に到るまで強大な支配力を持ち続けることになるのである。この制度を実体的に支えたのが自然主義文学者たちである。彼らは内なる「自然」を露出することを方法として意欲的に創作に取り組んだが、その試みはやがて「私小説」を派生させることとなり、日本独得の文学風土を生む原動力となったのである。こうした自然主義文学に対抗するかのように、二人の文学者がそれぞれ独自に文学制度を定立させていった。個人で一つの文学制度を屹立させたのは、この二人、すなわち夏目漱石と森鷗外以外にありえなかった。

その他、詩歌や演劇の世界においてもようやく新しい制度が定立したわけで、この明治三〇年代末から四〇年代は文学の制度的確立の時代と言うことができる。この制度が次の時代の谷崎潤一郎や「白樺」派、あるいは芥川龍之介たちに重苦しくのしかかっていったのであり、彼らはそれからの自由を求めて表現に賭していったのである。

## 「」の巻のためのノート

本巻は明治時代の文化や文学を対象として、それらが近代的な一つの制度を形成していくプロセスを追っている。江戸幕府が崩壊し、日本が国際社会の中で統一国家として自立することを迫られた時、日本が先進諸国である西欧近代国家を目指して自らを変身させようとしたのはやむを得ない選択であった。国家がこのように全身的に西欧近代化していくこうとするプロセスにおいては、文化や文学もまた西欧近代化という改編のプログラムのただ中に身を置かざるを得なかったのも当然のことであった。

本巻は文化や文学の西欧近代化の中心を言葉や文体の組み替え、つまり口語化、口語文体化としてとらえ、それがほぼ定着した明治四〇年前後までを追ったものである。明治四〇年前後には文学においては口語文体が支配的となり、それは現在にまで及んでいる。だから、この時期に現在に至る日本文学の近代的制度が定立したとみることはきわめて正統的だと言ってよい。

言葉や文体の組み替えは人間の思考じたいの組み替えを意味している。たとえば、口語文体はそれまでの文体ではとらえきれなかった様々な世界を表現可能にしていた。人間が全身の感覚でキャッチする外的な自然などは、口語文体でなければ表現し得なかったはずだ。確かに口語文体はそれまで不可視であった世界を可視のものとし、それをからめとっていくようにしたのである。こうしたことによって人間は変貌し、文学はより広い豊かな世界をきり拓くこととなったのである。本巻は一貫してこのプロセスを証し立てていくはずである。

しかし、一方で口語文体が駆逐していった日本の伝統的な文体に

も注目しなければならない。それは口語文体では表現し得ない世界を保有しているからである。事実、鷗外の初期三部作をはじめとして、露伴、透谷、一葉、鏡花らの文学はまさしくそうした世界を具現してやまない。だから日本文学の近代は、一方でこうした伝統に根差した奥深い世界をその底部にかかえ持っているわけで、それらとのダイナミックな関係にこそ日本独自の近代を発見していかなければならない。本巻はそれに十二分の力を注いだが、なお、そのダイナミズムをとらえきっていないうらみが残る。

さらに文化の組み替えは言葉だけにとどまらない。建築・絵画・音楽・演劇などより広い文化の組み替えを追っていく必要があった。第一部の第一章や第二章で総論として展開しているが、個別的にはなお十分であった。特に絵画と文学の関係は、写生というポイントで触れられてはいるが、絵画そのものをより大きくとらえるべきであったかもしれない。以降の文学史の課題でもあらう。

文化や文学の実体的基盤をなすジャーナリズムについては可能な限り、その発生と生成のプロセスを追ったつもりである。ただ、これも文化や文学との有機的な関係でとらえない限り、社会的な事象のまともに終始することになる。だから、あくまでも文化や文学との関係においてのみ触れる形をとったはずである。



第一部 新しい言葉をめがして



鉄道馬車 西洋の事物の流入が大きな変革をもたらした。それは「言葉」についても例外ではなかった。